

鶴見祐輔と河合栄治郎

——交友三十三年——

松井慎一郎

はじめに

大正末期から昭和初期にかけて、教養主義・自由主義思想を説いて多くの青年たちを魅了した人物に、鶴見祐輔（一八八五—一九七三年）と河合栄治郎（一八九一—一九四四年）がいる。両者とも学生時代に新渡戸稲造の感化を強く受けた「新渡戸宗」の一員であり、お互い「比類なき友情」で結ばれた大親友であった。⁽¹⁾ ファシズムを批判したことで現在でも語られる機会が少なくない河合とは対照的に、鶴見の名はあまりにもなじみが薄い。⁽²⁾ 鶴見が、大正末期から昭和一〇年頃にかけて、小説、旅行記、新史伝を通じて説いた理想主義、自由主義、人格主義、西欧的教養、国際的なものの見方は、非常に幅広く感受性豊かな青少年たちの心の奥底に定着していったのであり、和子と俊輔の父というだけの評価は決して当てはまらないだろう。⁽³⁾ 後述するように、河合も鶴見を通じて理想主義、自由主義を深めていったのであり、近代日本における理想主義、自由主義を

考察する上で鶴見は決して過小評価されてはならない存在である。

「自由主義史観」に代表されるように、「自由主義」と呼ばれる言葉が安易に使われ、その内容が曖昧になりつつある現在、歴史上の自由主義者を具体的に取り出して検討する作業の意味は決して小さくない。昭和初期にそれぞれ「新自由主義」、「第三期自由主義」を主張して注目された鶴見と河合をとりあげる意味もそこにある。鶴見祐輔と河合栄治郎の交流を題材とすることで、「日本の自由主義の歴史において空前絶後」⁽⁴⁾の自由主義思想の体系化を目指した河合が、鶴見という先輩の自由主義者から何を学び、何を発展・克服しようとしたのかという過程を探ることが本稿の目的である。

一、第一高等学校弁論部を通じて

河合栄治郎に鶴見祐輔という存在を知る機会を与えたのは、一九〇七年二月二三日、第一高等学校嚶鳴堂で行われた都下学生連合演説会であった。当時、東京府立第三中学校四年生で談話部委員であ

った河合は、案内状を貰いはじめて一高の門を潜り、先輩学生の雄弁を聴く機会を得た。なかでもとりわけ河合の注意を惹いたのが、東京帝国大学法科大学一年生鶴見祐輔の「日本海々戦の回顧」と題する演説であつた。⁽⁵⁾二年前の日本海々戦を題材にしたこの演説は、

「日本海々戦は日本民族の使命を確立せるもの也」、「諸君、進んで我民族の使命の為に五十年の生涯を捧げやうでありませんか」というように、日本海々戦の勝利を契機に青年が「愛国心」や「民族の大使命」を自覚し国家の為に献身的に行動すべきことを主張したものであつた。しかし、それは單純に國家主義を鼓吹して個人主義を否定するといふものではなかつた。「当今、往々にして、個人の修養、自家の造詣と、國家的思想とが兩立せざるものなるかの如く、考へて、國家的な愛國的思想を有することハ、これ即ち個人の修養を怠り、自家の啓発を閑却することの爲めであると、考へられてゐるやうである。私は信ずる断じてこれは誤つてゐる、眞正の愛國、眞正の國家的思想は實に最も眞面目なる個人的修養から来らなければならぬ」と、愛國とか國家とかといふ言葉を口々に唱へるだけの淺薄的野心的な國家主義者を否定し、個人的修養を十分に行つた上で國家の爲に尽くすといふ眞の愛國心の必要を訴えていた。⁽⁶⁾それは、一九〇六年一〇月以来鶴見が師と仰いできた一高校長新渡戸稲造の理想主義・人格主義、すなわち個人の人格的完成をはかるとともに國家・社會に積極的に働きかけていくことを主張する理想主義思想の影響を大きく受けたものであつた。當時、國家主義少年の河

合が、鶴見の演説から新渡戸思想の中核を読みとることができたとは考えにくい⁽⁷⁾が、いずれにせよ、鶴見の演説に大きく感動し、「どんなことをしても一高に入らうと」強く決意、入学後は弁論部に入部して新渡戸思想の忠実な支持者となつていったのである。⁽⁸⁾

一高弁論部の活動を通じて、河合と鶴見がお互いに初めて出会つたのは、河合がすでに三年生に進学して弁論部委員となつていた一九一一年一月のことであつた。河合は卒業生の鶴見に講演を依頼すべく勤務先の内閣拓殖局朝鮮課に鶴見をたずねた。初対面の河合を見て「血色のよい、眉毛の濃い、感じのよい青年」との印象を持つた鶴見は、用談が済んでも話が止まらず、役所を出て帰路を共にするほどの好意を寄せた。⁽⁹⁾河合の方も、長年憧れてきた大先輩と直接会話できたことに感動し、翌日鶴見宛に「何卒今後とも宜しく御指導下されたく生は四年前貴兄が日本海々戦の回顧を論ぜられしとき胸躍らして会場を出でたる當時を懐ひ翻つて今や貴兄と親しく御話を承り得るに至るを思へばいと感慨の切なるもの有之候。生は將來に於て此感慨の切なるもの益多からんことを祈りて止まず候」と綴つた書翰を送つた。⁽¹⁰⁾こうして、河合の死に至るまで約三十三年間に及ぶ二人の交友が開始されたのである。

鶴見と直接交流することによって、河合の中で新渡戸流の理想主義思想は一層深められていった。一九一一年一月二〇日付の鶴見宛書簡の中で、「久しく向陵に雄弁をきかず生は貴兄の弁によりて朝鮮の悲劇の語る、を思ひ胸躍らして待ち居り候」と、一高弁論部の

演説大会で、F・A・マッケンジー『朝鮮の悲劇』(*The Tragedy of Korea*, 1908) についての演説を鶴見に依頼している。「ロンドンデイリー・メール」の記者によって書かれたこの書は、開国以後の韓国政治の変遷、保護条約締結後の日本の強圧政策、国権回復を目指して戦う韓国義兵の活躍などをルポ形式で詳細に紹介、日本の帝国主義・軍国主義的傾向を鋭く批判していた。当時、拓殖局朝鮮課にあつて日本の朝鮮政策に直接関与していた鶴見がどのような感慨をもつて読んだのかということは明らかではない。後年の鶴見の植民地・アジア認識から見て、日本の朝鮮支配自体を否定したとは考えられないが、「刀を手にして従属民族の上に君臨する東洋の奇跡ではなくて―それを長く保つことができないからだ―、東洋に平和をもたらず者、東洋の教師たる奇跡への将来を。日本は、より高貴な結果を選び取るであらう⁽¹³⁾」という一文で結ばれるこの書から、軍部主導による残虐極まる朝鮮支配を否定し、朝鮮民衆との融和を考慮した人道主義的な支配を目指さなければならないとの決意を抱くようになったのではないかと推測される。理想主義・人格主義を觀念に止まらず、現実の仕事に行き渡らせようとする鶴見の熱意に、河合は感動し演説を依頼したと考えられる。結果的に、一月二六日に開かれた演説大会で鶴見は「*"Tragedy of Korea"*」を讀みて殖民政策の真相を思ふ」と題する演説を行い、特殊部落の実情を論じた丸山鶴吉の演説とともに聴衆を大いに感動させた。その内容は不明であるが、当時一高一年生の矢内原忠雄は日記に「両方の演説とも

非常によかつた。下層社会の慰安たり力たらざるべからずと叫ばれた。自省と活動とを、いづれにも偏しても駄目だと叫ばれた。痛かつた頭も演説を聞いたらや、なほつた様だ⁽¹⁴⁾」との感想を綴つた。「to be」(自省)と「sociality」(社会性)を強調する新渡戸の理想主義は、門下生が実際に社会で活躍していくことで、青年たちに影響を一層及ぼしていくことになった。河合も社会的弱者に対する視点を失わず、『職工事情』を讀んで労働者の悲惨さを知り、工場法施行に関与したいとの思いから大学卒業後農商務省に入省したのである。

河合は、鶴見との交流が深まるにつれて新渡戸が強調したフレンドシップ(友情)の大切さを身をもつて体得、それを周りの友人たちに強く及ぼしていくようになった。「ある日本人が英国で道に迷つたとき英国人が深切に道を教へて呉れたとき厚く御礼を云つた時に其英人が私に礼云ふよりも今度日本で道に迷つた外国人に深切をつくしてやつて呉れと云つた美しい物語。僕は人に深切をして貰つた時には最大なる感謝の道は他人に向つて又深切を尽すことであると思ひます。貴兄等先輩が私共に与へられた深切を私は一高の生徒や中学の生徒に尽して居る積です。何卒之だけは御喜び下さい⁽¹⁵⁾」と述べているように、後輩たちに親切を尽くした交際を持つに至つた特に、一高の二年後輩にあたる矢内原忠雄に対する態度は顕著で、後年の敵対者に対し同性愛にも似た親密な友情で接したのである。⁽¹⁶⁾つまり、鶴見祐輔という人物を経由することで新渡戸流の理想主

義思想は河合の中に大きな根を張ることができた。鶴見という存在は、一高卒業後も常に河合のよき相談相手であり、農商務省への就職、婚約者との破談など人生の転機に際して大いに尽力、激励した。⁽¹⁷⁾また、農商務省に入省した河合は、一時期、臨時産業調査局に配属され日本の産業政策を調査することになり、国家を絶対的なものとする国家主義官僚に陥るが、鶴見主宰の「火曜会」に参加、一高弁論部員らとウィルソン米国外大統領などを語る機会を得、自己の倫理面での理想主義・人格主義思想を維持することができたのである。⁽¹⁸⁾

二、米国出張―二人の分岐点―

鶴見を媒介に新渡戸流の理想主義を忠実に継承した河合であったが、農商務省時代の一八一八年八月から翌年五月にかけての米国出張によって、鶴見との間で若干思想上の距離をあげることはなった。河合の出張とはほぼ同時期、一八年九月から翌年六月までの九ヶ月間、鶴見もまた鉄道院の命で米国に出張した。出張当初、一人下宿で読書に耽るという生活をしていた河合に対し、鶴見は「本を読むなら日本で読める。高い旅費を政府から貰って来て居りながら、日本で出来ることをしてゐては申訳ない。アメリカへ来たならアメリカ人に沢山会ひなさい」と忠告した。その結果、河合は奮起して「連日人に会ひ、会合会食し、意見を交換し、材料を蒐集」するという生活を展開、多くの体験・知識を得ていった。⁽¹⁹⁾河合の場合、米国の労働

問題研究が出張目的であったため、労働問題の当事者たる労働組合関係者との会見・交流が頻繁に行われた。米労働総同盟(AFL)のS・ゴンバースや女性労働運動家のE・ハザノウィッチらとの交流を通じ、労働問題・社会問題に関する認識を深めていくことができたのである。一方、鶴見の任務は、造船用鋼材の不足を埋めるべく、米国から鋼材を輸入しこれと同じ重量屯の船舶を返すという「船鉄交換」という国策実現のための交渉を行うというものであり、大統領や国務長官らの政府高官との会見が多くを占め、労働問題や社会問題に触れる機会は殆どなかったのである。⁽²⁰⁾

しかし、鶴見がその当時の会見記をまとめた『欧米名士の印象』には、ウィルソンやランシングらに紛れてE・ハザノウィッチとの会見記が含まれており異彩を放っている。鶴見はハザノウィッチの「妾は正銘生粹の革命児であります。明日にも餓死致すであります」という力強い言葉を耳にし、「凡そ人は其の志に忠なること將に斯の如くでなければなるまいと自分は泌々感に打たれ、恰も鉄槌で頭部を撲かれたやうな心地がして、思はず頭の下ることを禁じ得なかつた」との印象を持った。⁽²¹⁾この会見はハザノウィッチの親友である河合が取り計らったもので、河合の感化によるものであったがゆえに、鶴見はこの無名の「反体制」運動家に共感を示したようである。⁽²²⁾この会見記にも記されているように、鶴見がいかにつむじ曲がりとはいえ、ハザノウィッチやその友人たちを前に、日本に米騒動は起こらなかったと断言したことは、社会問題に対する理解の浅

さを示している。この鶴見の保守性に対し、ハザノウィッチらの感化によって幾分進歩的となった河合が、米国の社会問題を正しく認識させ、社会思想への理解を深めさせようしたのではないか。

また、出張を通じて河合は、A・V・グイシー『十九世紀英国に於ける法律と輿論との関係』(*The Relation between the Law and Public Opinion in England in the Nineteenth Century*) から大きな影響を受けた。一九世紀英国法の発達におけるベンサム主義の功績を高く評価するこの書から、河合は「ベンサムが単に社会思想として自由主義を提唱しただけでなく、その根柢に下部構造として、茫大なる哲学を建設し、認識論、人間観、道德哲学、社会哲学を築き、その上に始めて当面の社会改革の思想として、自由主義なる社会思想を導き出したこと」⁽²⁴⁾ すなわち思想体系としての自由主義の存在を教えられた。このことにより、河合はそれまで分離していた哲学・人生観としての理想主義と社会思想を緊密に結合させることを思い立ったのである。この体系化への努力こそ、その後の活動を通じて一貫して見られるものであり、師の新渡戸や先輩の鶴見には見られないものであった。ここに、河合の社会思想や哲学に対する関心は深まり、農商務省辞職後は社会思想史研究に邁進することになるのである。

河合が出張を終え米国を發つ際に鶴見に宛てた書簡から、二人の關係の微妙な変化が読みとれる。「鶴見さん、あなたは永く私の努力の的である勤勉の対象でした。そして、あなたによって私は世に

人に推奨されて来ました。今度のアメリカ生活はあなたに對して一層深い愛着を感じしめて呉れた事は私の非常の喜びとする所であります」と友情の深化を実感する一方、「私は長い間あなたの苦い友でありたいと希つてゐました。しかし、段々近頃あなたの温い友であらねばならない事を感じる様になりました」と友人としての立場の変化を述べている。そして、「あなたは短命にして仆れては屑より外残らない方である。あなたは石に囓りついても永く生きねばなりません。人のライフはいつどこで切つても何か物になる人とボツリと切られてはまるで売物にならない人とがあります。あなたは完成しなければならぬ方です」、「あなたはどうか左も右も向かないで真正面に突進して戴きたい。磁石が常に北を指す様にあなたの眼は常にちつと眼差す方に集中されて戴き度い。向ふ一年間のあなたは非常の期待を以て私は日本に俟つてゐます」との期待感を述べる⁽²⁵⁾。これは先輩から色々と教えを請う後輩としての立場から發せられた言葉では最早ない。先輩の鶴見に見守つてもらふというより、逆に鶴見を見守つていこうとする立場が現れている。出張中に得た体験・知識が、河合をして鶴見より進んだ、先んじたとの意識を持たせるようになったのではないかと考えられる。

三、「新自由主義」と「第三期自由主義」

官を辞した後、東大経済学部教員として一九世紀英国を中心とす

る社会思想史研究に邁進した河合と政治家・作家としての道を歩んだ鶴見との間で思想上の溝は深まっていた。それは鶴見と活動を共にすることの多かった新渡戸と河合の間の思想上の距離も示していた。欧州留学中の一九二四年九月、新渡戸と久方ぶりに会った河合は「どこか保守的であるのに驚いた。日本に於て真面目な人が保守的なのは困る。時弊此にあると思ふ」⁽²⁷⁾との印象を抱いた。

一九二八年二月の第一回普通選挙で初めて衆議院議員に当選した鶴見は、長島隆二、藤原米造ほか中立議員と図って尾崎行雄の指導を受け、政友、民政両党間のキャスティングボードを握るべく明政会を結成、さらに、自己の思想的立場を明らかにすべく、新渡戸稲造を会長にたてて「新自由主義協会」を創設、月刊機関誌「新自由主義」を発刊した。鶴見の提唱する「新自由主義」とは、一九世紀英国の自由放任主義（レッセ・フェール）とは区別する意味で「新」の字を冠したものであり、「適当なる国家の統制を一般個人の活動に対して認める点に於て、寧ろ資本家専制を容認する保守主義よりも団体主義の観念を多量に含有してゐる」⁽²⁸⁾という。つまり、国民各人の自由な経済競争を黙認するのではなく、労働条件の改善、社会保険、救済制度など社会政策の実施をはかって、「正當なる国家の統制によつてのみ、初めて真実なる個人の自由があることを主張する」⁽²⁹⁾というものであった。しかし、理想とする社会・国家像、それに至る実現方法などを明確にしたものではなく、社会思想としては甚だ曖昧なものであった。鶴見が強調したのは、「新自由主義」

はマルクス主義のような明白な体系を持った思想ではなく、「人間を人間らしく取り扱ふ」という「中庸」と「寛容」の精神を含む「心持ち」「心の框」であるということであつた。それは、「新自由主義といふのは、個人の自由を尊重する。しかしながら、隣人を害するやうな自由は抑へて、個人の自由も、およそ己の欲するところに従ふ道を開き、五箇条の御誓文にもある通り、吾々の望むところを得る道を拓いてやるといふ、頗る簡単なるものである」⁽³⁰⁾という新渡戸と同様、政治思想、社会思想にまで及んだ広範な思想体系ではなく、哲学・人生観の上に止まっていたものであつた。しかし、新渡戸のようにキリスト教やカーライルを初めとする西洋思想から汲み出したものではなく、「自由主義の思想は、日本国民思想の中核に現存する」⁽³¹⁾、「神道のごとく寛容にして自由なる思想は少いと思ふ」というように、日本の固有・伝統的な思想の中から汲み出そうとするものであり、多分に日本主義、保守主義的要素の強いものであつた。

そうした鶴見の思想を河合はどのように見ていたのであろうか。鶴見が「新自由主義」を本格的に提唱する前年（一九二七年）の文章になるが、鶴見の思想・行動を評した優れた論評にXYZという匿名の「鶴見祐輔論」がある。これは「経済往来」の常設欄「人物評論」として書かれたものであるが、その筆名XYZとは「経済往来」の編集に関与していた河合栄治郎や本位田祥男らが替わり合つて執筆するための共同のペンネームであつた。⁽³²⁾鶴見の論評者として、

鶴見のことを知り尽くした親友が選ばれるのは自然なことである。

文中にある鶴見と新渡戸との関係や火曜会の様子などは、鶴見と密接な関係にある者しか書けないものであり、河合の筆による可能性が極めて高い。仮に河合が直接書いたものでなくとも、その執筆者が河合から色々と情報を得て河合の鶴見評を大いに参考としながら書いたと見ることもできよう。いずれにしても、ここで展開される鶴見評は河合の鶴見評とほぼ同じものであると見ていいだろう。

ここでは、新渡戸とその周辺の感化によって、鶴見が個人主義・理想主義の哲学・生活原理を把握したことを「時代に先んじた」と評価するものの、「どの程度にまで深く此の思想を自己のものとして体得したか」、「果して倫理観としての理想主義、社会観としての個人主義を、人格的に結び付く程、之を理論付け基礎付けたかどうか。彼の中に根深く巢食つてゐた国家主義と立身出世主義とを、完全に克服しえたかどうか」との疑問を述べる。河合が理想主義・自由主義を唱えるに際し、一貫して克服すべき日本人の人生観、社会観としてあげていたのが、国家主義と立身出世主義であった。これらの思想を清算するためには「一方に於て国家主義と立身出世主義とを理論的に意識し分析し批判し、他方に於て個人主義と理想主義とを体系的に把握し、理論的に基礎付け」という思惟的経路を経なければならぬが、鶴見はその他の新渡戸門下と同様、「充分に理論付ける丈の思索的努力を果さず、その「個人主義と理想主義とは、単に国家主義と立身出世主義に対する消極的のものたるに止

まつて、旧思想の一隅に僅の存在を保つ寄生虫のやうな貧弱なものであった」と指摘する。そして、その理由の第一は、師の新渡戸が「常識として理想主義と個人主義とを教へるには適任ではあるが、之を体系化する頭脳の所有者ではな」かった、第二に進学先の東京帝大法科大学には、「社会観としての個人主義を理論的に教へうる人」がおらず、「国家主義に対する個人主義を喚起しえなかつたのみならず、凡そ社会組織といふものに対する批判を教へなかつた」からであるという。⁽³³⁾つまり、河合は鶴見をはじめとする新渡戸門下の理想主義・個人主義に欠陥・限界を見出していたのである。

そして、それをさらに明解に指摘するのが、同じく『経済往来』「人物評論」として掲載されたXYZ「那須暗教授論」⁽³⁴⁾である。ここでは、鶴見や前田多門らの新渡戸門下を「理想主義者たるに拘はらず、孤立独善の仙人ではなかつた。彼等は期せずして経国済民の志士であつた。又彼等は空論に駆られて、融通の利かない鈍物ではなかつた。現実界の勝利者たるべき辣腕を持つてゐた。之が彼等の大部分が期せずして官界に入り、能吏となりやり手となつて成功した所以である」と評価するものの、二つの欠点を指摘する。第一に「好學の志」を欠き、「教養を尊んだ、所謂修養の爲に諸子百家を渉獵した」が、「人を作るに因はれて、社会の客觀的事象の研究に疎そかであ」り、「問題を拉して科學的研究をすること」には不得意であつた。第二に「社会問題に対する理解を欠」き、「経国済民の志士」ではあつたが、「經濟の方策は依然として政治の改善にあ」

り、「政治の為に政治を改善するにあつて、近代社会問題の真諦は、遂に彼等の関心事から脱してゐた」。そのため、「成功した官吏となり政治家となつたに拘はらず、彼等は囚はれた改革家たるに止まつて、社会問題解決を念とする改革家たりえざる」と指摘する。しかし、その一方、新渡戸の理想主義の下に育てられながらも「その特徴を身に体して充分に相続しつゝ、その雰囲気を解脱して、別個の境地を開拓した」、「教養の広さを保ちつゝ、社会の客観的事象を研究する科学者となつた」少数者として、那須皓、森戸辰男、そして河合栄治郎をあげる。⁽³⁵⁾つまり、河合は、哲学・人生観としての理想主義・個人主義を保持しながらも、社会思想として発展させることができず、社会問題に正面から切り込むことのできない新渡戸門下の先輩たちの思想に限界を感じ、その限界を克服することで自らの学問的使命を果たそうとしたと考えられるのである。

河合は鶴見の社会問題に対する認識の浅さを苦々しく感じていたに違いない。それは二人の友情が強いだけに、他の先輩たちに対してより一層強いものであつただろう。だからこそ、河合は鶴見に対して学問的に感化して、その社会問題及び社会主義に対する認識を深めさせようとしたのである。一九三二年一月一日付の鶴見宛書翰では、J・ヘッカー『ロシア社会学』(Russian Sociology)や伊藤秀一『ロシア社会運動史』の読書を勧めている。⁽³⁶⁾さらに、そのことを象徴的に示すのが、一九三二年に留学先のドイツで鶴見に対して行つた個人講義である。マルクス主義研究を目的に二度目の欧

州留学に出ていた河合は、衆議院選挙に敗れ外遊していた鶴見とベリンで再会、鶴見のために「社会思想の講義」をすると申し出た。⁽³⁷⁾河合は、七月二十八日から翌月二二日にかけて計二一回、『社会政策原理』(一九三一年刊)の内容に関する講義を鶴見に行つたのである。

『社会政策原理』は河合の社会思想史研究の集大成といふべき大著で、自己の理想主義思想体系を明確にするとともに、資本主義を徹底的に批判し社会主義の実現を主張していた。河合はここでマルクス、エンゲルスはもとより、ヒルファディングやカウツキーなどのマルクス主義文献に大きく依拠して資本主義に対する鋭い科学的分析を行っている。マルクスの余剰価値説をほぼ全面的に肯定し、それに沿つて資本家の労働者に対する搾取、商人の消費者に対する搾取、資本家相互の闘争などの議論をすすめ、「生産手段の私有の廃止と生産の統制」などの条件をそなえた「社会主義」社会への改革を主張する。しかし、その改革の実現方法は暴力革命ではなく議会主義に基づくというものであり、改革の思想体系として、本体論、認識論、欲望論、道徳哲学、社会哲学に及ぶ理想主義思想体系を説明した。『社会政策原理』では、「第一章 緒論」「第二章 社会問題」「第三章 資本主義の解剖」「第四章 資本主義の批判」「第五章 各社会思想の批判」という構成になっているが、講義では、一、二章をはぶき、四、五章の順序を入れ替えている。これは短期間の集中講義という性格上やむを得ない構成であつたと思うが、三、五

章については節をいくつか省略しているものの、第四章は原著どおりであることから、第四章を強調するスタイルを取ったと考えられる。

これは、依然として資本主義の改革、社会主義の実現を認めない鶴見を説得しようとする意志が強かったためではないか。

その後の鶴見の思想と行動から考えて、その講義が鶴见到どれほどの影響を及ぼしたかはわからないが、鶴見は河合の講義を真剣に聴いたらしい。「河合栄治郎君講義」と題するルーズリーフノート⁽³⁸⁾には、一〇八頁にわたって鶴見の字が丹念に書き込まれ、必死にノートをとった様子がわかる。また、講義を終えた当日の日記には「河合君の十二年来の研究の大意を知り、得る処頗る多し⁽³⁹⁾」と、後年の回想では「全く病人の口を割って薬を注ぎ込むやうにして、わたくしの無学を啓発したのである⁽⁴⁰⁾」と記し、河合の学問に少なからず感動した様子がうかがえるのである。

河合は欧州留学から帰国後、軍部・ファシズムと対抗する中で自己の思想を一層明確にし、自由主義が論壇で活発に議論される中で、「第三期自由主義」という独自の自由主義思想を主張するに至った。河合が初めて「第三期自由主義」を主張したのは、欧州留学から帰国した年に書かれた「自由主義の再検討」（『改造』一九三三年一〇月）である。河合は自由主義をその西欧における発展段階にしたがい三つの形態に分類する。第一段階の「原型としての自由主義」は、一八世紀末から一九世紀初めの西欧に見られたもので、社会制度としては経済的自由主義、哲学的基础として啓蒙哲学ないしは功利主

義哲学をもち、J・ベンサムによって充全なる思想体系を完備した。第二段階の「新自由主義」は、一九世紀半ばから二〇世紀初めに及び、経済的自由主義を放棄して社会改良主義をとり、理想主義哲学を基礎とし、T・H・グリーンを代表的思想家とする。そして

「第三形態としての自由主義」は内容的に「理想主義的社会民主主義」ともいうべきもので、理想主義を哲学的基础としながらも資本主義を廃止するという社会主義を志向し、英国労働党を主な担い手とする。ここで、河合は第二段階と第三段階の自由主義の相違、

「新自由主義」の限界を強調する。グリーンらの「新自由主義」が社会問題に着目して経済的自由主義を放棄し、前段階の自由主義を発展させたことは評価するものの、社会問題を「労働者の生活条件を向上させること」に限定し、「社会に資本家と労働者と云ふ二階級があり、搾取と被搾取と支配と隷従との関係にあり、不労の所得者と労働の所得者とが対立することを以て社会問題とする」⁽⁴¹⁾までには至らず、「資本主義と云ふ特殊の社会組織の解剖にはその手が及ばなかつた」⁽⁴¹⁾点に「再発展」する必要があつたと指摘する。

第二段階の「新自由主義」に対する評価は、日本の論壇を一時期さがした上田貞次郎や鶴見祐輔らの「新自由主義」に対しても相当するものであつた。しかも、グリーンらと違って、日本の「新自由主義」の場合、本体論から社会思想に及ぶ体系をなしたのではなく、その点も河合にとって批判の対象となつた。「大正年代の末期に上田貞次郎氏、鶴見祐輔氏により新自由主義が唱へられた。然

し上田氏は吉野氏等と反対に経済学者として、社会改良主義を説くに止まり、鶴見氏は一抔の理想主義哲学に触れてはいるが、社会思想としての自由主義に及んでいない。社会生活に対する氏の綱領は漠として捕捉し難い⁽⁴²⁾という。先行の自由主義者の限界を、社会改良主義に止まっている、思想体系として完成されていない等の点に求めた河合は、「第三期自由主義」の体系化という点に自己の使命を見出したのである。同時期の清沢洌や馬場恒吾の自由主義思想に対して、社会主義を主張するという点で「第三期自由主義」に属すると認めながらも、自由主義を「心の態度」「心構へ」「心持ち」と規定して社会思想と混同していることを批判する⁽⁴³⁾。つまり、資本主義を否定して社会主義を主張するとともに、それを本体論、認識論、人間観、道徳哲学、社会哲学、社会思想に及ぶものとして体系化するという点が河合の自由主義の特徴であった。河合は、台頭してくるファシズムに對抗しようとして自由主義思想の体系化を急いだ。「自由主義は意識されず、唯消極的反撥的たるに止まつて、強烈なる信念となるに至らない」⁽⁴⁴⁾ことに日本における自由主義の最大の欠点を見出した河合は、「實際勢力としては有力であるが、体系を所有するに至らない」ファシズムに對抗するため、「今より後自由主義者に残された任務は、今まで単に消極的反撥に止まつた自由主義に、組織と体系とを与へることである」⁽⁴⁵⁾と主張したのである。

新渡戸やその門下生から受け継いだ理想主義・自由主義思想を、哲学・人生観上に止まらず社会思想にまで揚げ、一つの渾然たる思

想体系として確立することが河合の生涯の課題であった。

おわりに

新渡戸やその門下生（前田多門、高木八尺、那須皓、高柳賢三ら）は、太平洋問題調査会の活動に見られるように、満州事変以後、日本の軍事的大陸進出を追認し正当化していった⁽⁴⁶⁾。特に、鶴見は日米開戦後、米内光政内閣の内務政務次官、翼賛政治会総務、大日本政治会総務などを歴任し、軍部にも近づき戦争に協力的な態度をとっていった。娘の和子が「公人としての父は自由主義を説いたが、おこないは別であった」⁽⁴⁷⁾というように、その自由主義思想の矛盾を露わにしていた。それとは対照的に、河合は、満州事変以後、軍部・ファシズムの横暴を批判して自由主義的行動を貫き、「戦闘的自由主義者」としての評価を得ていった。河合は、同じ新渡戸門下の俊英たちが軍部・政府の既成事実を認めていく中であって、自分だけは自由主義の砦を守っていかうとしたのではないか。理想主義・自由主義を完結した壮大な思想体系として確立しようとする河合の学問構想には、「巨大な世界観として圧倒的な思想的影響をふった唯物論的社会主義としてのマルクス主義に思想的に對抗しようとする企て」⁽⁴⁸⁾とともに、ファシズムへの思想的対抗、具体的には自由主義が哲学・人生観上に止まっていたため、現実の政治的社会的動向を監視することができず権力に迎合していった新渡戸門下の先

輩たちの欠陥を克服しようとする意図が含まれていたのである。

そして、その河合の努力を鶴見は最後まで認め蔭ながら応援した。一九三九年の平賀爾字で河合が東大を休職させられると、鶴見は河合に資金提供をしたり、河合に殉じ職を辞した山田文雄を自らが主宰する太平洋協会に招くなど、河合のための便宜に惜しまなかった。河合の死を招いたバセドー病治療のため武見太郎を紹介したのも鶴見であった。また、戦後、河合門下が河合思想普及を目的に社会思想研究会を発会した際にも積極的に協力した。それらの好意は「自分がなすべきであって、できないことをしている人に対する、一種の罪感の痛みをとまなう支持」⁽⁴⁹⁾から来るものであったと思われる。

鶴見は河合の死の翌日（一九四四年二月一六日）、日記に「河合君の死により、私は最大の友人を失ひ、日本は最大の自由主義者を失つた」⁽⁵⁰⁾と記した。まさに、鶴見と河合は互いの生涯を通じ欠くことのできない親友であった。

注

※『河合栄治郎全集』全三巻別巻一（社会思想社、一九六七・六九年）からの引用は、巻数を①～③頁というように略記した。なお、全集版では現代かなづかいに改めているが、ここではなるべく原典に従い旧かなづかいに復した。また、原典の所在に関しては「全集」各巻を参照されたい。

(1) 土屋清「比類なき友情」（北岡寿逸編刊『友情の人 鶴見祐輔先生』、一九七五年）を参照。

(2) 鶴見に関する伝記はこれまでのところない。鶴見の活動や人となりを知

る上で最も詳細なのは、前掲の回想集『友情の人 鶴見祐輔先生』である。鶴見の思想を単独で扱った研究は管見する限り、藤野正「昭和初期の『自由主義者』——鶴見祐輔を中心として——」（『日本歴史』四一五、一九八二年二月）だけである。藤野論文は鶴見の思想を対英米協調という対外認識の視点から捉えることに力点を置いている。また、石田雄「日本の政治と言葉」上（東大出版会、一九八九年）は、昭和初期の「新自由主義」論として、上田貞次郎、沢田謙とともに鶴見の「新自由主義」を紹介している。

(3) 河合栄治郎研究会九七年度研究発表会（一九九七年一月一日）における阪谷芳直「鶴見祐輔と河合栄治郎」報告での指摘。

(4) 松沢弘陽「自由主義論」（『岩波講座日本通史』一八巻、岩波書店、一九九四年）二七四頁。

(5) 河合「学生時代の回顧」一九三六年、①一五三頁。

(6) 鶴見祐輔「演説原稿 一九〇四—一九〇九」（国立国会図書館憲政資料室所蔵「鶴見祐輔関係文書」書類の部三九二二）。

(7) 新渡戸の理想主義・人格主義とそれに基づく人格教育については、武田清子「土着と背教」（新教出版社、一九六七年）を参照。

(8) 前掲河合「学生時代の回顧」、①一五四頁。

(9) 一高、東京帝大時代の河合については、拙稿「河合栄治郎の学生時代——理想主義者の形成——」（『史観』一三六、一九九七年三月）を参照。

(10) 鶴見祐輔「交友三十三年」（社会思想研究会編『河合栄治郎 伝記と追想』社会思想研究会出版部、一九四八年）二〇九—二一〇頁。

(11) 鶴見祐輔宛河合栄治郎書翰、一九一一年一月一三日付（『鶴見祐輔関係文書』書類の部一九九—二〇）。

(12) 「鶴見祐輔関係文書」書類の部一九九—二〇。

(13) マッケンジー著、渡部学訳『朝鮮の悲劇』（平凡社、一九七二年）二六〇頁。

(14) 『矢内原忠雄全集』第二八巻（岩波書店、一九六五年）二〇頁。

- (15) 鶴見宛河合書翰、一九一一年一月二九日付（「鶴見祐輔関係文書」書翰の部一九九一三）。
- (16) 河合と矢内原の二高時代の友情については、矢内原伊作「矢内原忠雄伝」（みすず書房、一九九八年）を参照。
- (17) 鶴見宛河合書翰、一九一四年二月二五日付（「鶴見祐輔関係文書」書翰の部一九九一五）及び一九一六年一〇月二二日付（「鶴見祐輔関係文書」書翰の部一九九一〇）。
- (18) 農商務省時代の河合については、拙稿「河合榮治郎の労働問題研究——大正期進歩的官僚の思想と行動——」（『日本歴史』六〇四、一九九八年九月）を参照。
- (19) 前掲鶴見「交友三十三年」、二六―二七頁。
- (20) 竹内徳治「鶴見先生の思い出」（前掲「友情の人 鶴見祐輔先生」）一五四頁。
- (21) 鶴見祐輔「欧米名士の印象」（実業之日本社、一九二一年）一六四頁。
- (22) 鶴見和子「河合先生とわたくしの父」（『河合榮治郎全集月報』一三、一九六八年九月）五頁。
- (23) 前掲「欧米名士の印象」、一六九頁。
- (24) 河合「私の理想主義と自由主義」一九三六年、⑪一七六頁。
- (25) 鶴見宛河合書翰、一九一九年五月一日付（「鶴見祐輔関係文書」書翰の部一九九一八）。
- (26) 河合は一九一九年一月に農商務省を、鶴見は一九二四年二月に鉄道省をそれぞれ退職した。
- (27) 河合「日記」一九二四年九月七日条。⑫一五六頁。
- (28) 鶴見祐輔「新自由主義の立場より」（『改造』一九二八年五月）二六頁。
- (29) 同前、三〇頁。
- (30) 新渡戸稲造「内観外望」一九三三年（『新渡戸稲造全集』第六卷、教文館、一九六九年）二二二頁。
- (31) 鶴見祐輔「中道を歩む心」（大日本雄弁会講談社、一九二八年）九四頁。
- (32) 美作太郎「戦前戦中を歩む―編集者として」（日本評論社、一九八五年）一八九―一九〇頁。
- (33) XYZ「鶴見祐輔論」（『経済往来』一九二七年八月）五―六頁。
- (34) 河合「日記」一九二八年六月一六日条に「今週は月火と二日で那須（皓）君の評論をして、火曜には午前三時になつて了つた。そして又之を書いた」（⑫二八三頁）とあるから、筆者は河合と断定していいだろう。
- (35) XYZ「那須皓教授論」（『経済往来』一九二八年七月）二二―二三頁。
- (36) 「鶴見祐輔関係文書」書翰の部一九九一一。
- (37) 鶴見祐輔「日記」一九三二年七月二六日条（「鶴見祐輔関係文書」書類の部三七七三）。
- (38) 「鶴見祐輔関係文書」書類の部三九〇八。
- (39) 鶴見祐輔「日記」一九三二年八月二二日条（「鶴見祐輔関係文書」書類の部三七七三）。
- (40) 前掲鶴見「交友三十三年」、二三二頁。
- (41) 河合「自由主義の再検討」、⑪三〇三―三〇四頁。
- (42) 同前、三一四頁。
- (43) 河合「自由主義の批判を繞る思想界の鳥瞰」一九三五年、⑫二二五―二二六頁。
- (44) 河合「混沌たる思想界」一九三四年、⑬二二六頁。
- (45) 同前、一三〇―一三一頁。
- (46) 中見眞理「太平洋問題調査会と日本の知識人」（『思想』七二八、一九八五年二月）を参照。
- (47) 鶴見和子「自分と意見のちがう子どもを育てた父親への感謝」（前掲「友情の人 鶴見祐輔先生」）三五一頁。
- (48) 前掲松沢「自由主義論」、二七三頁。
- (49) 前掲鶴見和子「河合先生とわたくしの父」、六頁。
- (50) 前掲鶴見祐輔「交友三十三年」、二〇六頁。